リフレクティブ機能と安定したアタッチメントによる 不適切な養育環境が解離に与える影響の緩和

○徳山美知代¹・田辺肇²・上野永子^{1*}・後藤和史³
(¹静岡福祉大学・²静岡大学・³愛知みずほ大学)
キーワード: 解離, メンタライゼーション, 虐待

Reflective function and secure attachment moderate the effects of adverse home environment on dissociation.

Michiyo TOKUYAMA¹, Hajime TANABE², Noriko UENO¹ and Kazufumi GOTOW³

(¹Shizuoka University of Welfare, ²Shizuoka University, ³Aichi Mizuho College)

Key Words: dissociation, mentalization, maltreatment

目 的

虐待をはじめとする不適切な養育環境がアタッチメントシステムの形成に与える影響や混乱したアタッチメントからの回復の文脈において、メンタライゼーション(Bateman & Fonagy, 2004)が着目されている。それは、他者との相互作用を意味づけ预期するために、自己や他者の主観的状态の理解を用いる能力であり、その操作的指標として成人アタッチメントインタビュー(AAI)の語りなどを対象にしたリフレクティブ機能(Fonagy et al., 1991; 以下 R 機能)の評価が用いられている。

養育者とのリフレクティブな関わりやその後の安全感のある環境は、注意や抑制といった覚醒調整の能力を高め、内的状態の一貫性ある知覚をもたらし、これらが安定したアタッチメントの発達やメンタライゼーションを可能にすると考えられている(Bateman & Fonagy, 2004; Schore, 2001)。また、不適切な養育は子どもにアタッチメントシステムの過活性化とメンタライゼーションの制止を起こさせ(Allen & Fonagy, 2006)、注意の問題(Chugani et al., 2001)や解離(Fonagy & Target, 1997)を生じさせるとされている。

そこで本研究では、虐待などの不適切な養育環境が解離を発達させる過程におけるアタッチメントとメンタライゼーションの調整効果に焦点を当てた。不適切な養育環境にあったとしても、安定型アタッチメントが獲得されている場合や R 機能が高い場合には、解離性の発達が緩和されると予想した。安定したアタッチメントやメンタライゼーション/R 機能が解離の発達を緩和することが明らかになれば、メンタライゼーション/R 機能の向上に焦点をあてた不適切な養育環境の影響からの回復の支援へと結び付けられる可能性もあろう。

ところで、AAIなどの語を用いる R 機能の評価は、そのままでは質問紙調査による検討には適用できない。そこで本研究では、R 機能を簡便に捉える方法として、質問紙調査で得た自由記述から R 機能(自他の心的状態から、自他の行動の意味を認知・理解しているか否か)を分析する方法を用いた。

方 法

調査参加者と手続き 2013年7月にA大学の学生を対象に、参加者の権利とプライバシー保護について説明を行った上で無記名の調査に協力を求め、後述の調査を実施し、242名(男性77名、女性165名:平均年齢19.5歳)を分析対象とした。

測度 解離はDES日本語版(田辺・小川, 1992)、不適切な養育環境はCATS日本語版(田辺, 1996)、アタッチメントスタイルはRQ日本語版(加藤, 1999)、R機能は後述する手続きを用いた。

体験報告と評定 R機能を把握するため、自由記述の形式で、虐待などの不適切な養育を含む養育者との不快な経験について、その内容と、養育者がそのような行為を行った理由についての参加者の考えの記述を求めた。AAIの認定コーダーを含む臨床心理士2名が、記述のトランスクリプトから、自他の行動の意味に関する認知・理解を抽出し、前掲のR機能の基準に該当する記述か否かを判定した(不一致は話し合いにより合意したものを採択した)。該当/非該当/理由無回答/内容も無回答の4カテゴリで分析に供した(R機能カテゴリ)。

結 果

指標の処理 CATSはTanabe et al. (2014)の下位尺度をターゲットとしたTwo-stepクラス分析を用いて参加者を「虐待的(n=69)」「非虐待的」の2クラスに分類した(養育環境クラス)。RQは「安定型(n=50)」以外のタイプを「不安定型」として2群に分類した(アタッチメントスタイル)。またR機能カテゴリは各々n=153/43/13/33であった。

解析モデル 養育環境クラス×アタッチメントスタイル×R機能カテゴリを独立変数、DES得点を従属変数とした一般線形モデルを用いて検討した。分析にあたっては、3要因交互作用項を誤差項とし、主効果および2要因交互作用のみによるモデルを用いた。

主な結果 養育環境クラス×アタッチメントスタイルの交互作用が有意傾向で(F(1,229)=2.953, p=.087)、単純主効果検定では、「虐待的」クラスで「不安定型」スタイルの方が(F(1,229)=6.267, p<.05)、「不安定型」スタイルで「虐待的」クラスの方が(F(1,229)=11.302, p<.01)DES得点が有意に高く、「虐待的」かつ「不安定型」の場合にのみ得点上昇が認められた。

また、養育環境クラス×R機能カテゴリの交互作用が有意で(F(3,229)=3.485, p<.05)、単純主効果検定では、R機能カテゴリ「非該当」(F(1,229)=4.060, p<.05)および「内容も無回答」(F(1,229)=8.721, p<.01)で、養育環境クラス「虐待的」の方がDES得点が有意に高かった。

考 察

生育環境が不適切であり、かつ不安定型アタッチメントスタイルを有しない群のみで高解離傾向が認められたことは、安定したアタッチメントの形成が、不適切な養育環境による解離性の発達を緩和する役割を果たすという仮説と一致する。また、養育者の不適切な行為の理由について、R機能の基準に該当しない記述(「わからない」「しりたくない」など)を与えている群で、養育環境が不適切である場合に高解離傾向が認められたことも、R機能が不適切な養育環境での解離性の発達を緩和する役割を果たすという仮説と一致する。一方、不適切な養育環境にあったにもかかわらず、養育者の不適切な行為の記述自体を与えていない者の中には、具体的な体験の言語化もしくは意識化に困難があった者が含まれている可能性もあると考えられ、そこで高解離傾向が認められたことも解釈可能である。

ところで、生育環境の質やその認知がアタッチメントスタイルやR機能と関連することは明らかであり、今回の解析では独立変数間の独立性は担保されておらず、その複雑な経路の検討にはより洗練された解析法の採用が求められ、十分なサンプルサイズによる再検討が必要だろう。なお、アタッチメントスタイルとR機能カテゴリには関連があることが予想されるが、今回の結果では明確な関連は認められなかった。また、生育環境をはじめ指標はすべて自己報告をベースにしたものであることも留意が必要だろう。以上のような限界はあるが、本研究の結果からは、不適切な養育環境にあった者にみられる解離傾向の発達において、安定したアタッチメントやメンタライゼーション/R機能が一定の役割を担っていることが示され、また、簡明な自由記述を求めそれを判定することでR機能の測度を得るアプローチの可能性が示唆されたといえよう。

※本研究は、科研基盤(C)24530748, 24530862の助成を受け行われた。